



日本企業のグローバル展開を支えるJETOB達

～異文化コミュニケーション研修専門機関

(株)インテック・ジャパンにお聞きしました～

近年、多くの自治体が新たな海外戦略を軸に海外へ打って出ています。その背景には、加速する日本企業の海外展開の動きがあります。海外展開を支えるグローバル人材に必須なのは、「異文化コミュニケーション」能力。それは、語学力だけでは乗り越えられないものです。そこに焦点を当て、人材育成に貢献しているJET卒業生たちがいます。株式会社インテック・ジャパンでは、日本企業向けの「異文化コミュニケーション研修」で20年以上の実績を持ち、7人のJET卒業生が精鋭の講師陣として活躍しています。



インテック・ジャパン
プログラムディレクター
1991年～1994年に島根県で
ALT。その後インテック・ジャ
パンへ入社し18年間、日本企業
向け異文化コミュニケーション
研修の講師を務める。イギリス
出身。

Gareth Monteath (ガレス・モンティース)

—— 島根県でALTをされていたそうですね。

1991年から3年間島根県立津和野高等学校に勤めていました。来日の前年、津和野高校は野球で甲子園出場を果たしました（私も甲子園の応援に参加したかったです。うらやましかったです！）。基本的には週3日津和野高校、残りの2日は鹿足郡の中学校と吉賀高校に勤務し、日本人の英語の先生の助手として主にコミュニケーション系の授業を担当していました。津和野高校ではESS部

とサッカー部にも参加させてもらいました。

—— JET時代の印象深い「異文化コミュニケーション」はありますか？

たくさんあります。イギリスでは生徒が職員室に入る時は、先生に呼び出されるか、叱られる時なので生徒は行きたがりません。私のいた日本の学校では授業中は静かな生徒が授業以外では職員室に殺到し、先生と会話を楽しんでいました。また、イギリスでは部活に参加する人はかなり少ないのですが、島根ではほとんどの生徒が部活に参加します。そして、昼食が終わると先生を含めみんなで掃除をすることも初めての経験でした。みんなで協力して自分たちの環境をきれいにするのはとても良いことですね。

—— JETでの経験は、今のお仕事にどんな風に活かされていますか？

現在の会社に1994年に入社当初、異文化コミュニケーション研修ではチームティーチング（team teaching）が行われていませんでした。これを取り入れればさらにダイナミックな研修ができるかと先輩や上司に相談し、導入することになりました。インストラクターとのロールプレイングは、セミナー参加者への細かい気配りができ、彼らの理解度を確認しながら2人体制で行う重要なセミナースキルです。このノウハウにはJETで培われた経験が活かされています。また、現在の会社スタッフ10人のうち7人はJETのOB、OGです。JETを通して巡り会えた日本の学校での経

験があるからこそ日本のサラリーマンの皆さんと良い関係が作れると感じています。

— この20年間で、日本の「異文化コミュニケーション」をとりまく環境は変わりましたか？

日本に来た21年前、「国際化」という単語をよく聞きましたが、現在は「国際化」ではなく「グローバル化」という言葉をよく聞きます。一番大きな理由は海外との仕事が増えたからでしょう。それは今後も続き、日本国内企業間だけの仕事は少なくなり、外国企業との関係が増え続けることは明らかです。そのため、ビジネスにおいても異文化コミュニケーションを重視する傾向が強くなっています。また、最近では、「多様性」という単語がよく見受けられ、日本人同士でさえも異文化コミュニケーションが必要だと思う人が増えていると感じます。年齢、性別、地域、教育などが違う人がいて多様性があるイコール異文化コミュニケーションにつながると思われるのです。

— 「異文化コミュニケーション」や「グローバル化への対応」が重要性を増す中、日本社会にとって「JETプログラム」の果たす意義について、ご意見を聞かせてください。

JETプログラムは大きな役割を果たしています。ドイツ語やフランス語も大事ですが、英語は世界の共通語になりつつあります。21世紀は英語のできない人にとって困る場面が多くなると思います。そのため、英語を単なる学問的存在として捉えるのではなく、学校で外国人の先生と勉強をすることによって外国人に触れ、生きた英語を使えるようになることが大切になっていきます。また、JETプログラムには、参加者が卒業してから続く効果もあります。JETで日本に滞在した人々が、帰国後、日本の良さを彼ら自身の母国に伝えていく役割を果たしていますから。私自身JETに深く感謝しています。JETばんざい！



日高 達生

インテック・ジャパン
マネジャー
大手企業の組織・人事領域の
コンサルティングに約10年従事。
現在は、営業や採用を含むイン
テック・ジャパンの経営業務に
携わっている。

— どのような企業からの研修依頼が多いですか？

弊社が提供する「異文化コミュニケーション研修」は、日本企業の海外赴任予定者を対象に、集合研修形式で実施されます。従って顧客には、早くから海外に生産拠点を開設してきた製造業が多く、また研修としてある程度まとまった人数を集められる大手企業が中心です。近年では、その進出先として中国、インド、タイなどアジア諸国の比率が高まっています。

— 近年、研修実績が伸びていらっしゃるそうですね。その人気の背景は？

現在弊社では、年間100社以上の取引実績があり、ありがたいことにその案件数は例年増加傾向にあります。その要因は2つ考えられます。

1つ目は、「講師陣とプログラムのクオリティの高さ」です。それを証明するものとして、約9割の案件は既存顧客からの再発注です。さらに、一度その良さを知っていただくと、別の対象やテーマについても相談され、取引が拡大することは多くあります。

2つ目は、「日本企業の海外展開の加速」です。日本人駐在員にとって、異国の地で多様な価値観のメンバーをマネジメントし成果をあげることは至難の業です。そのため、異文化間の摩擦を解消するために「異文化コミュニケーション研修」を実施しようという日本企業が増えてきています。

— 今後も、「異文化コミュニケーション研修」への企業ニーズは高まっていきそうですね。

最近では、日本企業の中期経営計画の中には必ずと言っていいほど、海外展開のシナリオが描か

れています。また社内では、日本人社員を「グローバル人材」に育て上げるための施策が急ピッチで整備されています。TOEICなどを基軸とした「語学力の強化」は既に多くの企業が取り組んでいますが、次に求められているのがビジネスでの成果に直結する「異文化コミュニケーション」です。日本企業の海外展開が止まらない限り、このトレンドは今後もしばらくは変わらないと考えています。

— 10人の講師陣のうち、7人がJET経験者。御社にとってJET経験者の魅力や強みはどのような点ですか？

弊社の講師は、日々大手日本企業の幹部を相手に仕事をするため、相当なパフォーマンスレベルとチームワークが求められます。そのため、採用

時には業務上関係する10人以上が面談をし、多くの観点で審査をする厳選採用を行っています。結果的にJETプログラム卒業生の比率が多い理由は3点考えられます。数年間滞在することで鍛えられる「高い日本語レベル」、ALTとして経験してきた「チームティーチングへの慣れ」、そして「日本文化との異文化体験と、そこへの愛情」です。特にALTとして初めて学校に出向いた時のカルチャーショックのエピソードは、日本企業の参加者にとって自分たち日本人の常識と外国人の常識の違いを知る重要なファクターとなるのです。また弊社に勤めるJETプログラム卒業生に共通する特筆すべき点は、日本を愛し、日本企業のグローバル化に貢献したいというモチベーションかもしれません。

ある日の研修にお邪魔してみました！

この日の講師は、JETOBの2人。講師がJET時代に実際に体験した日本のビジネスシーンをリアルに再現するたびに、参加者は「そうそう！（笑）」と大きく相づちを打っていました。特に、ビジネス会議で欧米人ばかりが発言し、日本人が聞き手になるロールプレイでは、大きな笑いが生まれ、共感やうなずきに会場内が包まれました。

講師はJET時代に築いたチームティーチングのスキルを活かし、すばらしい演技力で、わかりやすく参加者を誘導していきます。参加者は、企業の海外赴任予定者や人材育成担当者の方々。今は、どこでも国際化が加速し、外国人との交流の機会が日常になりつつある中、異文化コミュニケーションの理解は欠かせないものになってきています。とはいうものの価値観や文化の特性といった目に見えないことを理解するのは、難しく感じる方も多いのではないのでしょうか。インテック・ジャパンの研修では、講師と参加者がフィー

ドバックを繰り返しながら、文化の根本的な傾向について理解を深めていました。そして、その傾向から発生している誤解やストレスの原因を乗り越えるためのスキルを習得していきます。JETOBが、国際ビジネスの場で大活躍し、講師として日本の国際感覚の増進に寄与している姿を大変頼もしく思いました。



(株)インテック・ジャパン
<http://www.intecjapan.com/>
 (研修の動画もご覧いただけます)